

日本の伝統音楽

ががく 雅楽

【雅楽】 奈良時代以降、宮廷、寺社の儀礼で用いられた音楽・舞踊。広義には①御神楽、東遊など日本固有の歌舞、②唐楽、高麗楽など大陸からもたらされた大規模な器楽音楽と舞踊、③催馬楽、朗詠など日本で生まれた室内歌謡の三つを含む。狭義には②を指す。②は舞を伴う上演形式・舞楽と器楽合奏だけの上演形式・管絃がある。

唐楽 日本で伝承される雅楽のうち、中国とその南方、西方の周辺地域に起源を持つ器楽。舞楽の場合は笙、箏、篳篥、太鼓、鉦鼓、鞀鼓、管絃の場合には上記に琵琶、箏を加えた編成の合奏。

高麗楽 日本で伝承される雅楽のうち、朝鮮半島に起源を持つ器楽。箏、篳篥、太鼓、鉦鼓、三ノ鼓で舞の伴奏を行う。古くは舞を伴わない管絃の演奏法もあったが、現在は失われている。

舞楽 大陸起源の器楽音楽を伴奏とする舞踊。左方と右方に分けられ、交互に演じられる。左方は唐楽伴奏で、暖色系の装束を着す。右方は高麗楽と一部の唐楽を伴奏とし、寒色系の装束を着す。

管絃 雅楽の唐楽で、舞を伴わない器楽合奏。笙、箏、篳篥、太鼓、鉦鼓、鞀鼓を用いる。現在の標準的編成は管楽器各3名、弦楽器各2名、打楽器各1名。

催馬楽 和歌や民謡などの日本語の歌詞に、唐楽風の旋律をつけた宮廷歌謡。9世紀に成立。笏拍子、笙、箏、篳篥、太鼓、鉦鼓、鞀鼓の伴奏がつく。

朗詠 漢詩に旋律をつけて朗唱する宮廷歌謡。笏拍子、笙、箏、篳篥の伴奏がつく。

御神楽 宮中や神社で行われる祭礼用歌舞。十数曲の歌曲の組み合わせから成り、全体は内容的に祭場のきよめ、神おろし、神あそび、神おくりの四部に分けられる。〈韓神〉と〈其駒〉という歌では人長という進行役による舞がある。

東遊 宮中や神社で行われる東国起源の祭礼用歌

舞。〈一歌〉〈二歌〉〈駿河歌〉〈求子歌〉〈大比礼歌〉から成り、〈駿河歌〉〈求子歌〉に舞がつく。

笙 雅楽で用いる管楽器。瓢に差し込んだ17本の細竹のうち15本の根本に金属製のリードがついている。唐楽では一種の和音である「合竹」、催馬楽では1本ずつ吹く「一竹吹」の技法を用いる。

篳篥 雅楽で用いるダブル・リードの竹製の縦笛。唐楽、高麗楽など外来系の音楽のほか、御神楽、東遊など日本系の音楽でも用いる。艶やかな音色とポルタメントの技法に特徴がある。

竜笛 雅楽の唐楽、催馬楽などで用いる竹製のノン・リードの横笛。7孔。「笛」「横笛」とも。

高麗笛 雅楽の高麗楽、東遊などで用いる竹製ノン・リードの横笛。6孔。竜笛より長2度高い音域を有す。

神楽笛 雅楽の御神楽で用いる竹製ノン・リードの横笛。6孔。竜笛より長2度低い音域を有す。

琵琶 4弦のリユート系楽器。「楽琵琶」とも。唐楽、催馬楽で用いられ、撥で弾くアルペジオ的な奏法が特徴的。古くは独奏曲もあった。

箏 13弦のツィター系楽器。「楽箏」とも。唐楽、催馬楽で用いられ、主に「閑搔」または「早搔」という決まったパターンを奏する。

和琴 日本固有の起源を持つ6弦のツィター系楽器。御神楽や東遊で用いる。琴軋という鼈甲片で弦を掻く技法と、指ではじく技法を用いる。

鞀鼓 唐楽で用いる樽型胴の両面太鼓。左右の撥で打つ。

大太鼓 野外の舞楽で用いる。行道時に用いる。荷太鼓、室内の管絃で用いる楽太鼓(釣太鼓とも)の3種類がある。三者とも先端が球状になった撥で、片面を打つ。

鉦鼓 金属製のゴング。凹面を2本の撥で打つ。野外の舞楽で用いる大鉦鼓、行道時に用いる荷鉦鼓、室内の管絃で用いる釣鉦鼓の3種類ある。

三ノ鼓 砂時計型胴を持つ締太鼓。高麗楽で用いる。右手の撥で右面を打つ。